
ぶちえ

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶちえ

【コード】

N5694J

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

20枚完結って難しいなあ。

ぶちえには悩みがあった。ありました。そりゃまあ人から見れば大した悩みじゃありません。でも、でも、ぶちえにとつちや大問題！

「はやく言え！」

ぶちえの悩みというのは、ケータイ小説のヒロインであるという悩みです。

「ヒロインなんてむっちゃんいいじゃんけ！」

よかありません。ケータイ小説業界では、暴力を受けたり妊娠させられたり麻薬をやらされたり、ひどい仕事がたくさんあるんです。

「普通に生活して普通に結婚してなんてストーリー面白くないだろ！」

面白くなくてもいいんです。普通でいいんです、あたし。

ここで語りはぶちえの一人称に切り替わる。

あたし、実は隣の席の田中くん恋してるんです。

でも田中くん、地味で鉄道おたくなので、作者から付き合うと言われてる。

イケ面で乱暴者だけど人気のある不良のモテ彦に恋せえと言われている。何でそんな変な名前のやつに恋しなきゃいけない。まああたしも、ぶち山ぶちえって変な名前だけどさ。

「ねえ。モテ彦くん。映画のチケット二枚あるんだけどあたしと行かない？」

「あ？映画？オレ、興味ないね」
むかつく！

あたしだって興味ないわよ。仕事だから誘ってんじゃない。
あたしは席に戻る。

「ぶつちい。残念だったね」

「う、うん」

全然、残念じゃない。仕事をしてただけだから。

田中くんが声かけてきた。

「オレ映画大好き。観にいきたいなあ」

ほんと？うれしい！

「行く？」

「いいのかい」

「もちろん！」

急に教室のドアが開き、ジャージ着たマッチョな黒人が入ってきて、持っていた竹刀で田中くんのお尻を思い切り叩いた。

「いてええええええ」

くそう。作者直属のおもしろ委員会のやつだ。この小説世界には、教室だけでなく、家、街なか、あらゆるところにカメラが仕掛けてあり、ちよつとでもつまらない方向に行きそうだなとモニターチエックしてる作者が判断したら、今のようにお仕置き隊がやって来て、竹刀でお尻をぶつのだ。

あたしは、作者に、こんなバカなこともうやめてちょうだい、あたしは田中くんとラブりたいのと何回も頼んだ。

そのたびに、作者は、そんなことしたら小説がつまらなくなる、すると売れない、売れないとお前ら餓死するんだぞと脅す。

確かにあたし、映画の仕事とか持ってないし……。

きんこーんかーんこーん。

あたしは、家に帰り、今度のバレンタインデーにモテ彦にあげるセーターを編んでいた。

本当は田中くんにあげたいんだけど、そんなことしたらまたお尻叩かれちゃう……。

ああ。やだ。やだ。憂鬱になってきた。何で、くそモテ彦のために編まなくちゃいけないのよ。いくら仕事だからって情けない。

「ケータイ小説のヒロインなんて辞めちみたい!!」

あ。思わず叫んでしまった。またお尻叩かれる。あれ？

あたしは、ドアの外へ出てみた。

すると、廊下に黒人が寝ていた。

「グーグーグー」

ああ。疲れてるのね。そりゃそうか。仕事とはいえ、この黒人さん、24時間あたしに張りついてるものね。

あたしは黒人さんに毛布をかけてあげた。

ということだよ？

あたし、今、自由なんじゃね？

あたしは、チャンスとばかりにケータイをかけた。

ぶるるるるるる。

「はい。田中ですけど」

「あつ田中くん。あたし。ぶちえ」

「あつぶちえちゃん」

「あのさ。今から映画観に行かない？」

「行く。行く、ぎゃあああああ」

「ツーツーッ」。

しまった。田中くん家ちにいる黒人さんは起きてるんだ。そりゃそ
うか。

チキシヨォー!

あたしは、仕方ないので、ロリ華にケータイした。

「なあに。ぷつちい」

「映画行かない？」

「え。モテ彦と行くんじゃないの」

「映画のチケット今日までだから」

「わかった。行く」

ロリ華とあたしは、駅前にある映画館に行った。ポップコーンとコーラを買い、席を探す。

「前の方で観ようよ」

「うん。迫力あるもんね」

暗くなり、ブザーが鳴り、『巨大イカの初恋』が始まる。

海。どこまでも続く海。潮風。その海の中に、巨大イカのいかっぺの家がある。イカの形をしている。いわゆる、イカ・ハウス。壁は白く、屋根がとんがっていて、エントツが見える。海の中だから煙は出てないけど、家っばいだろ？

今、いかっぺは、巨大タコのたこすけと将棋を差していた。

たこすけは腕三本くらいで「王手！」

「わっちやあ。やられたあ」

いかっぺは負けたので、たこすけの言うことを聞かなくちゃいけない。

「あんまり無茶なことは言わないでね」

「そうだなあ。まぐ子に告白するってのはとうだい？」

「ええっそんなあ」

実はいかっぺはまぐ子のが好きなのである。

「マジ？」

「マジ」

心臓がばくばくしてきた。噂によると、まぐ子はイソギンチャクの西山くんが好きだと聞いたことがある。あくまで噂だけど。

いかっぺは悩んだ。そりゃ告白してふられることを考えればしない方がましだ。でも、このまま一生告白しないつうのも何だか切な

い。

「これはチャンスかもしれないぬ！ひょっとしたらとらいつつとどがある！」

しかし、いかつぺは暗い部屋の片隅で悩む。いかんせん、オレは巨大イカだ。まぐ子ちゃんは普通のまぐろだ。オレのぶつといのがまぐ子ちゃんの小さい穴に……。

いかん。いかん。いかん。エロネタはいかん。この映画はちびっこも観ているのだ。

いかつぺはわかめのジャンパーに着替え外に出て、イカ・カーに乗り込んだ。イカの形をしている。白のボディ。先端がとんがっている。こういうくさくさする時はパチンコをするに限る。

高速で飛ばし、パチンコ屋「パシフィック」に着いた。まず台を探す。どれが出そうかな。

ぐるぐる回り、やっとお望みの台を見つける。座ろうとしたら、背後から声がある。

「おい。いかつぺ。いかつぺじゃねえか」

誰だと思い、振り返ると、おお。山下。

友達の山下だった。警官をしている。

「お前もこの台にするの」

「お前もか」

二人でしばらく譲り合ったが、結局パチンコなんてつまらねえということで、二人して居酒屋へ行った。

「部長のやつがよう。うちの娘を気に入ってしまったようなんだよ」

「娘さんていくつくらい？」

「小学六年生さ」

「ロリコンやないか！」

いろいろと話をしてるうちに、時計の針は深夜の12時を指していた。

「ああ。もうこんな時間か。ひっく」

「イカ・カーで送るよ。うー」

「いいよ。いいよ。泳いで帰るよ。ひっく。ひっく」

山下はそのまま平泳ぎをして帰った。

「さてと。酔いを冷まさないと。今イカ・カーに乗ったら飲酒検問に捕まっちゃう」

出し、竹刀を振り回しながら走ってくる。

「あわわわ。またや」

いかっぺはあわてて、まぐ子ちゃんの部屋の窓をノックした。
なぜノックできる。

みなさん。お忘れかな？ いかっぺは巨大イカなんだよ？

しばらくして、寝ぼけ眼のまぐ子ちゃんまなこが目をこすりながらカーテンを引いて、窓を開けた。

「????? いかっぺ君？」

「ま、まぐ子ちゃん！」

ああ。パジャマ姿もステキだ。萌える！

「あのその。まぐ子ちゃん」

「なによ。こんな遅くに」

「そのあの」

「なんかわちゃわちゃしてるわね。何か用なの」

「いや。はは。いい天気だね」

「何言ってるの。夜だよ」

「あつそうか。こいつはまいったな。わはははは」

「何か変なノリねえ」

いかつぺは焦る。もたもたしていると、また黒人に叩かれる。

でも、いざ本人を目の前になると緊張しすぎて、好きだの一言が

出てこない。

「もういい？あたし、眠たい」

「そんなあ」

いかつぺは泣きそうである。

とその時。

まぐ子ちゃんの背後から誰か現れる。

「ぶーーーーっ!」

ぶちえはまたコーラを噴き出した。

「ろ、ロリ華!!」

まぐ子ちゃんの背後に現れたのは何とロリ華であった。よく見るとスクリーンの隅の方に穴が開いている。あそこから入りやがったのか。

「煮え切らないイカだねえ」

「だ、誰だよ。きみ」

「ロリ華だよ」

いかっぺはロリ華をじっと見てるうちに思った。

か、かわいい!!

まぐ子ちゃんよりかわいい。

いかっぺは別の意味で焦ってきた。

「さっさと告白しろよ。スルメ野郎」

まぐ子ちゃんの顔が真っ赤になる。そりゃまあ、まぐ子ちゃんだってアホじゃないからね。いかっぺが何のために家に来たかくらいだいたい解るさ。

しかし、厄介なのは、いかっぺは今さっきからロリ華に恋してしまっただ。

「どうしたらいいんだ!」

いかっぺは、頭がショートしそうだ。

「早く、まぐ子に告白しちまえよ。スルメ」

まぐ子ちゃんもはらはらしてる。

いかっぺは、ロリ華を見てときどきしてる。

何よ。この状態！

ぶちえもスクリーンを眺めながら、ポップコーンを食う速度が早まる。

「いったいどうなっちゃうんだろう。この映画」

ずがあああああああああん。

「うわっ」

「ぎゃあああああああ」

一瞬の出来事であった。

スクリーンには、半壊になった、まぐ子ちゃんの家が現れた。ものすごい火と煙。

「緊急報道です。緊急報道です。ただいま上映中の「巨大イカの初恋」に登場するまぐ子さんの家に飛行機が突っ込みました。イスラム系過激組織による自爆テロと思われます。繰り返し報道します。ただいま上映中の」

火は映画館にまで回ってきた。

「あわわわ。逃げないと」

ぶちえは焦りに焦る。周りの観客も悲鳴を上げてわちゃわちゃしている。

というより、ロリ華は！

いかっぺはすでに焼きスルメになっていた。まぐ子ちゃんも焼きまぐるになっていた。ロリ華。ロリ華！

「ロリ華ア。ごほっ。どこよう。ごほっごほっ」

ハンカチで口を押さえ、ぶちえはロリ華を探す。早くしないと自分も火に巻かれて焼け死んでしまう。

「だ、誰かぁ」

ロリ華の声だ。

「あっ」

タンスの下敷きになってる。

「だ、大丈夫？ロリ華」

「大丈夫なわけねえだろう。いたたた。骨折れてる」

ぶちえは、四次元ポケットから秘密道具を取り出した。

「かるがる手袋！」

このかるがる手袋を使うと腕力が百倍になるのだ。

ぶちえはタンスを持ち上げて遠くに放り投げた。

「あ、ありがとうよ。ぷっちィ」

「お礼なら藤子先生に言っつて」

「藤子先生、ありがとう！」

ロリ華は空に向かって叫んだ。

「ところでさ」

「なあに」

「この映画さ。設定が海だろ？なのに、火が出るっておかしくね？」

「確かに」

その瞬間、スクリーンから大量の水が観客席に向かってものすごい勢いで流れでた。

「うわあああああ」

「ロリ華あああああ」

みんな、水に流されて映画館から飛び出した。

「あつぷ。あつぷ。どこに流れてくのよう」

「そんなの知るか。あつぷ。あつぷ」

まさしく、伊勢湾台風を彷彿とさせる。街は水浸しになり、ロリ華とぶちえはどんどん流されていった。

「わああああああ」

水の流れは速く、二丁目を越え、三丁目を越え、車とかも流される。じいさんも流される。犬もながされる。

「ポチー！ー！！」

「じつちやー！ー！わー！ーん！！（ポチの叫び）」

ぶちえとロリ華はある家の二階の窓に水といっしょに飛び込んだ。机の上に誰がいる。

「た、田中くん！」

「ぶ、ぶちえちゃん！」

何と田中くんの部屋だった。

「怖いよう。怖いよう」

田中くんは机の上でガタガタ震えている。すでに部屋は水浸しだ。ロリ華とぶちえもがんばって机の上に乗った。

「なんでこの机だけ流れないの？」

「ええっ」

ロリ華が余計なことを言うから、そのまま机は流されてドアを飛び出した。

「わああああああ」

「怖ええええ。ジェットコースターみたいいいい」

水といっしょに机に乗った三人は、向かいの部屋に飛び込む。窓が開いており、そのまま外へ飛び出した。

「うわあああ。すげえスピード」

「流されるうつつうつつ」

正直、田中くんはこんな状況だが興奮している。なにしろ、股間がぶちえのお尻に当たっている。しかも背中にはロリ華のおっぱい。

「はあはあはあ。いったいどうなるんだ」

PCの前で筋を追っていたやまもっさんも興奮してきた。

「しかし、この小説はちびっこも読んでいる。妙な展開にはならな
いだらう」

「いやん田中くん。何か硬いのがあたしのお尻に当たってる」

「ご、ごめんよう。ぷちえちゃん」

「おい田中。どうや。どうや」

「いやん！ロリ華ちゃん。おっぱい背中にこすりつけないで！」

やまもっさんはズボンを下ろした。

「はあはあはあ。ティッシュどこやったかな」

やまもっさんの部屋のドアを蹴飛ばし、中に、ジャージ姿のマツチヨな黒人が乱入した。

持っていた竹刀で、やまもっさんの生尻を思い切り叩く。

「むぎやああああああ」

三人は、どこへ行くのやらさっぱりわからない。ものすごいスピード。体がちぎれそうだ。あまりに揺れがひどく、振動のため、田中くんが股間をぷちえのお尻にマツチヨで打ちつけてるように見える。りーん。りーん。りーん。りーん。

「はい。はい。すみません。あれはやらしいことじゃなくて、本当に」

「すみません。すみません。エロではないんです」

作者の事務所にクレームの電話がひっきりなしにかかる。

書齋で執筆を中断していた作者がマネージャーに怒鳴った。

「お仕置き隊は何をしておるんだ！！」

「みんな、洪水で流されてしまいました」

三人を乗せた机はすごいスピードで、PCの画面から飛び出した。あるいはケータイ

「わっ」

たけしはひっくり返った。

たけしの部屋に倒れる三人。机はぶっ飛び壁に激突しぶっ壊れた。

「ロリ華ちゃん。ぷちえちゃん。田中くん。あわわわ。本物だ！」

たけしはサインもらおっかなあと思っただがまず三人を起こすのが

先決だ。

たけしは失神してる三人を布団に寝かせた。一枚しかないので、すぐく窮屈そうだが仕方がない。

「あつケータイ小説に夢中で時間に気づいてなかった」

たけしは今からバイトの時間なのである。たけしは、外務省で、国家間交渉のアルバイトをしている。時給は500円と格安だが、国のためと思えばやむをえぬ。

電車に乗り、外務省前駅に降りる。徒歩ですぐ。外務省がある。二階建てである。引き戸を引いて中に入る。

「あ。たけしさん」

「よしこちゃん。こんばんは」

「たけしさん。早速仕事よ」

「ちよつと待って。タイムカード通すから」

たけしは、更衣室で背広に着替えた。

自販機でコーヒーを飲んで落ち着いた後、事務のよしこちゃんに聞いた。

「今日はどんな仕事だい？」

「アメリカのトムさんと中国の金さんが来てるわ。二人ともめっちゃ怒ってたから戦争になるかもしれないよ」

「ええつ。なんかめんどくさそうだなア」

トムというのは当然、アメリカの大統領トム・ヤンクンのことである。そして、金さんというのは、中国の国家主席、金玉^金^玉臭^くのことである。

「まだ仕事があるわ。二丁目のラーメン屋の王さんが何かお客さんともめ事起こしたからその処理もお願したいの」

「わかった。先にこつちの仕事を片づけるよ。ところで、大臣はどこ行ってる？ カネ貸したまま、まだ返してもらってへんのやけど」
「パチンコに行ってるわ」

「あのくそ親父」

たけしは、ドアを開けて応接間に入った。
すでに大統領と国家主席が口喧嘩してる。

「フライドチキン！ハンバーガー！フライドポテト！」

「チンジャオロースー！ホイコーロー！マーボ豆腐！」

たけしは、ひとまず、二人の頭をはたき、ソファに座らせた。

「よろしい。二人とも、今からにらめっこするよ。負けた方が相手の条件を飲む。いいね？」

「3vtbnb5wbgとptgほtr^w!!!（英語でむちゃくちゃ罵倒してください）」

「ヴい@@rのvgwち0-ええろpvfvf！（中国語でぐつちやぐちやに悪口を言ってください）」

やかましいので、たけしはまた二人の頭を叩いた。

二人は頭を押さえて涙目だ。

「文句言わないの！今日は忙しいんだから！」

その数日後、中国とアメリカが戦争を始めたのだが、それは長くなるのでまたの機会に。

12 (完結)

深夜の12時。仕事を終えたたけしは、駅前の屋台で焼きイカを三本テイクアウトした。

「うふふふ。いかつぺみたい」

「兄ちゃん。今日は飲んでいかねえのかい？」

「うん。今日はお客さんが来てるんだ。もぐもぐ。いかつぺ、うめえ」

電車に乗る。

「田中に触るんじゃないよ！」

「ロリ華こそ！」

「ふええ。喧嘩はよくないよう」

その時、たけしの部屋の布団の中では、田中を挟み、ロリ華とぶちえが壮絶なバトルを繰り広げていた。

「ロリ華！あんた、今、田中くんの乳首触ったでしょう！」

「うるさい！お前こそ、田中のお（ピー！）ち（ピー！）ん（ピー

！）ち（ピー！）んから手を離せ！」

たちの悪いことにみんな素っ裸。みんなびしょ濡れだったので本当はたけしが着替えさせなきゃいけなかったのだが、たけしは貧乏なので着替えがなかったのだ。

とここで、急にモテ彦が登場する。なぜ。実はモテ彦はたけしの隣の部屋で一人暮らしをしていたのだ。モテ彦はお母さんが死んで新しいお母さんが家に来たのだが若くて美人のお母さん。ちよっかい出してるうちに親父に追い出されたのだ。

「隣づるせえなあ。眠れねえよ」

りーん。りーん。りーん。

「はい。はい。大変申し訳ありません。絶対に絶対にこれ以上、エロくしませんので」

「ごめんなさい。ちびっこに配慮した展開にしますんで」

りーん。りーん。りーん。

「うっせえ！あつたまきた！」

モテ彦はベッドから飛び出し、たけしの部屋のドアをどンドン叩いた。

素っ裸のぶちえがドアを開ける。

「どちら様。あ。モテ彦くん」

「え。ぶち山？」

モテ彦はぶちえの全裸を見てときまぎした。

お。ちよつと待てよ読者。モザイクかけるから。

「誰か来たんか」

あつ。ロリ華まで全裸で玄関に来やがった。ああ。モザイク。モザイク。ああ。チキシヨ！モザイクボタンが見つからねえ！

部屋を掃除してねえから！

「我慢できん！」

「きやつ。モテ彦。なんでズボン脱ぎやがるてめえ」

「いやーん」

モテ彦はロリ華に襲いかかった。

読者に言うの忘れてた！

実は、モテ彦は義母さんの他にロリ華のことも好きだったのだ！

りーん。りーん。りーん。りーん。

「すみません。すみません。すみません」

「大崎さん！ライス先生どこ行きました！」

「わからん。窓が開いてる。たぶん、パチンコ屋に逃げたのだろう」

ぶちえがどうしようどうしようとおわてると、竹刀を持って黒人がやって来た。

「あつ黒人さん。ロリ華を助けて」

黒人は一瞬あわてふためいたが、ぶちえの全裸を見て興奮してきた。竹刀を放り投げて、ぶちえに襲いかかった。

「いやあああああ」

田中くんは怖くなって全裸のまま窓から逃げた。

その頃、たけしは、疲れてるあまり、電車の中で寝てしまい、終着駅まで行ってしまっていた。

「むにゃむにゃ。金さん。トムさん。仲良くしろよう。むにゃ。むにゃ」

「君。何だね。こんな遅くに全裸で怪しいな。パンツくらいはきなよ」

「おまわりさん！そんなことより大変なんです！実はかくかくしかじか。へーつくしよん」

「何イ。それは大変だ。おい。山下。現場に行くぞ。レイプ事件発生だ」

「いひひひ。面白そう」

交番に、作者が走って飛び込んだ。

机の上に何か置いて去った。

どぎゃああああああああん。

「いでええええええ」

「むぎゃあああああ」

警官と田中くんはぶっ飛んだ。交番は燃えた。

走りながら、作者は叫ぶ。

「オレの小説を邪魔するやつは許さねえ！！！！」

闇夜に消える作者。

消灯。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5694j/>

ぷちえ

2011年4月30日20時55分発行